

漢語音「zi/ci/si」を表す満洲文字

中村雅之

1. 問題点

ダハイ(達海)によって改良された満洲文字では、満洲語にない漢語音を表すための表記がいくつか考案された。そこには様々な苦心が窺われるが、その中のピンイン「zi/ci/si」に相当する音節は、一見して整合性を欠く表記である。(以下、ピンインを「」で、満洲文字の翻字・転写を{ }で表す)

ピンイン	「zi」	「ci」	「si」
満洲文字の字形			
メンドルフの転写 ¹⁾	{dz}	{ts}	{sy}

すなわち、ピンイン「zi」にあたる表記と、他の二音の表記では母音の表記が全く異なっている。満洲文字のローマ字転写としてよく用いられるメンドルフの転写も、これらの音節に関しては甚だ不可思議なものである。翻字・転写の問題も検討には値するが、ここでは専らこれらの満洲文字表記の生成過程について考えてみたい。

2. 「zi」と「ci/si」に分けること

満洲語には[s]は存在したが、[ts]などの破擦音はなかった。そのため初期の満洲文字では、漢語借用音を記す際に破擦音(ピンインの「z」「c」に相当する音)をも{s}で表記していた(例えば「檔子(dangse)」など)。これはモンゴル文字で漢語を綴る際にも同様であった。ダハイは新たに破擦音の表記を作った訳であるが、中舌高母音を伴う音節では、上述のように無気音を伴う音節(ピンインの「zi」と有気音・摩擦音を伴う音節(「ci/si」)とで母音表記が異なっている。なぜ無気音とそれ以外で扱いが異なるのか。

この問いに対する解答はおそらく単純なもので、満洲語話者にとって[ts]と[s]が非常に似た音に聞こえたということであろう。それに対して[ts]は比較的区

1) Möllendorff, P.G. von, (1892), *A Manchu Grammar with Analysed Texts*, Shanghai.

別しやすい音であったと考えられる。類似の状況は10世紀に作られ、12世紀まで用いられた契丹文字における漢語音表記にも見られる。

吉池孝一(2003)²⁾によれば、契丹小字の表記法において、[ts][tsʰ][s]は初め区別されていなかったが、まず[ts]のための表記が作られて[tsʰ][s]と区別されるようになり、さらに次の段階で[tsʰ]の表記を作って三音を区別するようになったという。つまり、いま問題にしている満洲文字と同様に、有気音と摩擦音を同様に扱い、無気音と区別する段階があった。モンゴル語やツングース語の立場から漢語音をとらえると、[ts][tsʰ][s]の三音を区別する際には、まず無気音の[ts]が最も析出しやすかったのであろう。

3. 付属する母音の形状

次に問題となるのは、ピンイン「zi」に相当する満洲文字と「ci/si」に相当する満洲文字とで違う母音が表記されるという点である。

まず、母音部分の形状を確認しておく、ピンイン「zi」に相当する満洲文字の母音は{ke}や{be}の{e}に似るが、{dze}には全く別の形があるので{e}ではない。この字形の解釈にはいくつかの可能性がありうる。その1は、何の母音も表していない可能性。その場合には下部の線は末尾形・独立形の一部ということになり、全体が{dz}と翻字されうることになる。その2は、中舌高母音を表すための表記である可能性。その場合は例えば{dzy}のように特殊な母音であることを示す翻字が考えられる。その3は、{i}の変形である可能性。{si}の場合には{s}とは短い線で区切られた明瞭な母音{i}が綴られるが、ここでは子音{dz}に付随した形式になっている。{ki}や{bi}に表れる{i}にやや近い。ここでの母音を{i}の変形とすれば、全体は{dzi}と翻字しうる形式といえる。

以上の3つの可能性の中では、はじめの二つはあまり説得的ではない。なぜなら、有気音や摩擦音の場合に異なる母音を表記していることが説明できないからである。もしも漢語の中舌高母音のための表記をゼロ表記あるいは特殊な専用の表記とするのであれば、他の声母の場合にも同様の扱いをすることが期待される。しかし実際には明らかに扱いが異なっている。したがって、ここでは暫定的に上の「その3」、つまり{dzi}という解釈をとることにしたい。{i}の字形と見なす

2) 吉池孝一(2003)「漢語の精母系子音を表わす契丹小字について」『KOTO NOHA』第13号。

にはやや淡泊な(?)表記のように見えるが、同様の淡泊な(つまり、ふくらみのない)字形は{ba}や{ka}などの{a}にも見える。{a}は一般に{o}と{i}の組合せからなるが、末尾形の{a}における{i}はまさに{dzi}の{i}と同形である。

以上は無気音の場合である。一方、ピンイン「si」に相当する音節の満洲文字では、{se}の中央右に一画を加えた形式になっている。その形式の特徴を考慮して翻字するならば、{së}ということになるだろうか。(ただし、これまでの研究において、このような観点からの翻字・転写は一般的には行われていない。) 残る最後の音節(ピンインの「ci」)も{së}の場合と同様に{tsë}と翻字しうる形状になっている。この{tsë}の字形は{së}に準じて作られたものと考えられるから、問題は{dzi}と{së}の母音の違いに絞って差し支えないことになる。

4. 母音表記の違い

{dzi}と{së}でなぜ母音が異なっているのかという問題は二つの観点からの検討が必要であろう。一つは、{së}をなぜ{si}と表記しなかったかという観点であり、もう一つは逆に、なぜ{dzë}という表記が作られなかったのかという観点である。

はじめに、母音を統一して{si}という表記でピンイン「si」に相当する音節を表さなかった理由であるが、それは{si}がすでに満洲語[ʃi]を表す表記であったからである。そのため[sɿ]を表す表記として{si}を用いることはできなかった。初期の満文資料で{se}の表記が用いられていたのも、中舌高母音に最も近い表記として{e}が選ばれたのである。「四」や「司」の漢字音が{se}と表記されただけでなく、「子」などの破擦音も{se}と綴られた。なお、「先生」の意の満洲語{sefu}は、「師傅」という漢語が借用されて一般化したものである。ここでの「師」は清代の満洲文字文献では一般に{si}ではなく{së}と綴られるから、清代にはそり舌音(ピンインの「shi」)ではなく、[sɿ]の発音が優勢だったらしい。いずれにせよ、漢語の中舌高母音に対応する母音は、初期の満文資料では{e}であり、そのために、ダハイが新たに[sɿ]を表す表記を作る際にも、{se}に一画を加えて{së}としたのである。

次に、「子」などの漢語音を記すのに、なぜ{dzë}という表記が用いられなかったかという問題に移る。この問題の解決は容易ではない。{dzë}という表記は他の音節とも整合性の取れた明瞭な表記のように思われる。しかし実際には、そのような表記は用いられず、他の表記が考案された。その理由はおそらく文字作成

の順序にあるのであろう。もしも{së}が先に作られていたのであれば、それを応用して{dzë}を作るとは簡単であり、表記体系から見ても明瞭である。そうならなかったのは、ピンイン「zi」に相当する音節の表記{dzi}が先に作られ、その後で{së}が作られたからだと思われる。漢語音[ts][tsʰ][s]の分析に際して、まず[ts]を析出したのは上述の通りであるが、その段階ですでに{dzi}の表記を作ってしまった。その後で{së}の表記ができ、さらにその後で{tsë}ができた。そう考えれば、整合性のない表記が生まれた事情も幾分かは納得できる。なお、{dzi}に{i}が含まれるのは、漢語の中舌高母音を[i]の仲間と見なしたことを意味するが、これはそり舌母音を{i}の変形で表記したのと軌を一にする。すなわち、ピンイン「zhi」にあたる満洲文字は{ji}の右に圈点を加えたもの(メンドルフ式では{jy})であり、有気音の場合も同様である。{dzi}の場合には、いわば[dzi]という本来の満洲語にはない音節を表記することで漢語の[ts₁]に当てようとした訳である。その際に、あるいは、[i]という母音の明瞭さを弱めるために、その字形を通常の{i}よりもアッサリとした直線的な形状に変形したということもあるかも知れない。